

## [実践報告]

## 学生の振り返りから見えてくる海外研修の現状と課題

The Present Situation of Overseas Experience in America and  
Issues Revealed Through Students' Reflection

後藤田 遊 子\*

## 要旨

2012年度の「アメリカ研修」の研修目的は、ホームステイでの生活体験を通した英語・異文化コミュニケーション力の向上である。学生の振り返りや「研修成果レポート」を研修目的に沿って検証した結果、学生たちが事前研修で表明した自らの目的や与えられた課題について真摯に取り組んでいたことが分かった。期間中に教室という枠組みで学んだ英語を生きた英語コミュニケーションに繋げるには、英語授業を補完するアクティビティが必要である。本プログラムでは、ホストファミリーがその役割を全面的に担った。その結果、学生は悪戦苦闘しながら英語コミュニケーションに積極的に取り組んだ。また、ホームステイでの生活体験を通して文化の違いやアメリカ人のホスピタリティについて深く洞察しており、研修の効果を読み取ることができた。しかし、課題は残った。15日間の研修は手厚い"もてなし"の受身の体験学習であった。求むべきは、ホームステイ以外に学生が自主的に取り組む活動である。今後、さらに有意義なプログラムを実施するために、ボランティア活動など補完的アクティビティの追加を検討していきたい。また、短期大学生のみならず大学生についても幅広く参加できるよう提案していきたい。

キーワード：英語研修／異文化コミュニケーション／ホストファミリー／ホスピタリティ

## はじめに

本学はキリスト教主義の大学・短期大学である。短期大学部のアメリカ研修は短期大学のみ時代である1971年に英語専門の学科で開始して以来、英語研修を主たる目的で、研修先の語学学校や大学で、学生寮に滞在しながら実施されてきた。

1990年代前半までは、参加者数が学科学生の3分の2を超えるほど人気のプログラムであった。1990年代の終わりからは、入学生の減少に伴う参加学生数の減少や不況に伴う経済的負担などから、研修場所、プログラム内容、実施時期・期間の変更を大幅に行う段階となった。様々な思考錯誤の後、2004年に現在の「アメリカ研修」が開

始されたのである。全行程にホームステイを取り入れたのはこの時からである。当該学科は2005年に文部科学省が推奨する「地域総合科学科」として新たに出発したが、現在でも英語教育に力を入れている。

2004年の開始から2012年までに、2回中止を余儀なくされることがあった。1度は新型インフルエンザの流行のため、2度目は東日本大震災の年に最少人数の10人に満たないため中止になった。2012年度は13人の学生の参加により実施の運びとなった。例年、夏休みの約15日間の日程で実施していたが、2012年度は前期の6月中旬に実施し、欠席した授業の欠席回数は公欠扱いとした。実施時期を6月に変更したのは、学生への経済的負担を軽減することが最大の理由である。

しかし、学期半ばに実施することによって、学期中に事前研修・現地での研修・事後研修が手厚

くできるだろうという積極的な理由もあった。「アメリカ研修」は「海外研修Ⅰ」として単位化されているので、事前研修では研修の目的や、学生に求める目標を設定した。また、「異文化コミュニケーション論」の履修学生に対しては、学外における体験学習と位置づけた。こうした経緯で実施した2012年度の「アメリカ研修」プログラムを検証し、その結果を踏まえ今後の課題について論じてみたい。

## 1. 「アメリカ研修」立ち上げ

海外研修を実施する場合、大学の担当部署や担当教員が企画し、しかるべき旅行会社に必要な手配を委託するのが通常のやり方であろう。旅行会社の役割には2種類ある。手配旅行と企画旅行である。手配旅行は輸送と宿泊の手配のみの関わりである。企画旅行は旅行全体の計画から輸送・宿泊、そして、危機管理等の責任を旅行会社が負うものである。大学側は研修プログラムの教育部分の役割を担うことになる。双方の役割分担を円滑に進めるためには互いの信頼関係が求められる。「アメリカ研修」は、本学の研修に対する意図や要望を地元の旅行会社が引き受けて企画実施しており、企画の段階から緊密な連携をとって実施に至ったものである。実施回数を重ねるごとに、旅行会社と良好なパートナーシップを築きあげて現在に至っている。

旅行会社には、本学の要望として以下の点を挙げて企画を依頼した。

- ①滞在先は大都市ではなく、地方の小規模都市であること
- ②研修先はキリスト教主義の大学であること
- ③観光ビザで受けられる最大限の授業時間を確保すること
- ④英語授業は「英語・異文化コミュニケーション力の向上」を目的に、日常生活に密着した会話や語彙を中心に学ぶ。加えて、アメリカ文化の学びを組み込むこと
- ⑤ホームステイ先は、クリスチャンファミリーで、研修の目的や内容を理解して協力を惜しまない家庭が望ましいこと
- ⑥参加費用・必要経費を最小限に抑えるために観光旅行やホテル宿泊をしないこと

以上の点を考慮して、「アメリカ研修」プログラムが構築された。対象学生は、短期大学部は1年生と2年生の両学年である。当該学科のみ正課に組み込まれている。大学からの希望学生は任意に参加が可能である。

2. 2012年度「アメリカ研修」プログラム<sup>1</sup>

## (1) 概略

プログラムは英語研修とホームステイを柱に構成されている。研修の目的は、ホームステイでの生活体験を通した英語・異文化コミュニケーション力の向上である。コミュニケーション力を鍛えるために英語力に磨きをかけることはもちろんだが、滞在中に体験する様々な生活習慣や文化的な違いへの気づき、人々とふれ合い体感するホスピタリティや異文化理解、自分自身の成長、グローバルな視点の涵養などが学生たちに求められる目標となる。

滞在先の都市はミシガン州グランドラピッズ、人口約20万人の緑豊かな小都市である。オランダ系の人々が入植して栄えた町らしく、プロテスタント教会が多いのも特徴の一つである。また、大手クリスチャン出版社があることで知られている。研修先の大学はコーナーストーン大学（Cornerstone University）で、小規模なキリスト教系のリベラルアーツ・カレッジである。教養学部の言語学教授の監修の元で、TESOL(Teachers of English to Speakers of Other Languages)を勉強する学生の教育実習として学生講師（以後、チューターと呼ぶ）が英語（ESOL）授業を行う。また、教養学部から複数の教授が音声学やアメリカ文化、英文学についてミニ・レクチャーを行う。授業は1週間に約15時間（観光ビザで履修できる最大限の時間数）を当てている。コーナーストーン大学と本学との間では、毎回、引率教員と先方の担当教授やスタッフとが昼食を共にし懇談することによって、プログラムを円滑に進めるための友好的なコミュニケーションが図られている。

ホームステイ先での生活体験は英語研修と同様にプログラムの柱であるため、ホストファミリーの選択は最重要課題である。その点を旅行会社は理解して研修先を探した末に、グランドラピッズ在住でコーナーストーン大学に精通し、本学の要

\* GOTODA, Yuko  
北陸学院大学短期大学部 コミュニティ文化学科  
異文化間コミュニケーション論



望を理解して受け入れ可能な家族を確保できるアメリカ人を現地コーディネータに起用した。本学の要望は旅行会社に伝え、旅行会社はコーディネータに本学の要望を伝え、コーディネータが要望に合わせて現地での活動を取り仕切るという次第である。旅行会社およびコーディネータには、本学がこれまでもアメリカのキリスト教系の大学で研修を行ってきたことや、学生にはできるだけクリスチャンファミリーでの生活体験を望んでいることを理解してもらった。その上で、ホストファミリーは、単なる滞在先ではなく「アメリカ研修」の目的や内容を理解し、生活しながら生きた英語を学ぶという英語研修の補完的役割を担い、異文化体験を応援してくれる家族を選択してもらった。教会等を通して受け入れが確定したホストファミリーは、コーディネータからホームステイに関する事前ガイダンスを受けて研修の目的や内容を把握し、彼らの協力が必要不可欠であることを理解している。また、参加費用をできるだけ抑えるために、これまで組み込んできた観光・観光旅行を廃止して、ホストファミリーとともにアメリカの余暇の楽しみ方を体験し楽しんでもらうことにした。

## （２）事前研修

事前研修は筆者担当の「海外研修Ⅰ」で9回実施した。プログラム内容の詳細説明、各学生の参加目的や目標設定、アンケート調査、筆者が担当する「異文化コミュニケーション論」の復習を兼ねた異文化理解の態度・スキルについての講義、ホームステイの心得、家族・日本文化紹介写真や英語資料の準備、などが研修内容である。その他に、旅行会社による旅行やホームステイのガイダンスを2回、学生の保護者を対象にした説明会を1回実施した。これらの事前研修は、「アメリカ研修」の目的や学生に求める目標に沿って、学生のモチベーションを高めるためのものである。また、研修後に学生が取り組む研修成果レポートにも事前にテーマを与えており、与えられたテーマ・課題を意識して研修に臨むように指導した。

## （３）プログラムの振り返り

研修最終日の授業終了後に、学生たちはプログ

ラムを振り返ったレポートを書くことになっている。英語授業、チューター、ホストファミリー、アクティビティについての活動報告と今後の研修に反映するための意見などを書いてもらった。

### ①英語授業

海外語学研修では、午前中に英語の授業を行い、午後はその国の生活や文化を体験するためのアクティビティがプログラム化されているのが通常と思われる。本プログラムは午後にも英語授業を入れているのが特徴である。授業は8日間で1日平均5時間行われた。また、英語を介した異文化コミュニケーション力を高めることが「アメリカ研修」の目的であるため、授業は英語力強化のみが目的ではなく英語とアメリカ文化理解の二本立てで実施するように依頼していた。

2012年度の授業タイトルは"Learning English While Touring through the Big Cities of America"（アメリカの大都市を訪れ英語を学ぶ）であった。

英文法や日常的な表現に加え、アメリカの歴史、都市（ニューヨークについて）、文学（「ナルニア国物語」の映画鑑賞）、ポップ・カルチャー（音楽、ファッション）、そして、クッキング演習（スーパーへの買い出しを含む）などを取り入れたアクティブ・ラーニング的な内容を含む授業である。

以下は、学生の振り返りレポートからの抜粋である。

「授業内容はレベルも高めで充実していた。学生に発言する機会を均等に頻繁に与えられ理解度を確認できるように配慮がなされていた」、「LとRの発音は難しかった。日本語に無い発音はネイティブの人と会話をしないと身につかないと思った」、「パソコンを使って、スライドやYou Tubeを交えながらの授業だったので分かりやすく楽しかった」、「アメリカで授業を受けたことで、英語はもちろん、アメリカの歴史・文化も学ぶことができた」、「大学教授が日本人の私達が抱いているニューヨークのイメージを交えながら話してくれた」、「ニューヨークの話を聞いて、世界が少し広がった気がした。教授の英語もクリアで聞きやすかった」

### ②チューター

長い時間を共にする学生達とチューター2人は

昼食も一緒にとるなど親近感を増していった。チューターへの感謝の言葉がレポートに記されていたのは、チューターたちの人柄の良さもさることながら、教育実習であるため、毎日の授業は担当教授による厳しいチェックが入ることから、きめ細かいティーチング・プランが準備されていたこともプラスの要因と考えることができよう。

以下は、学生の振り返りレポートからの抜粋である。

「最初は何を言っているのか全然分からなかったチューターの英語も、慣れてくると分かるようになってきた」、「消極的な私たちが発言しやすいような環境を作ってくれた」、「チューターが、私たちに根気強くそして楽しく授業をしてくれたお蔭で、英語力の向上につながったと思う」、「自分たちで会話するとき日本語になってしまい、どうすれば"日本語禁止"を徹底できるか、事前に話をすればよかったと思う」、「チューターの2人から教えてもらったのは英語だけでなく、人間としてのあり方だった」

### ③ホームステイ

コーナーストーン大学周辺は公共交通機関が利用できる便利な場所とはいえない。各ホストファミリーの住居も市内から郊外まで点在しており単独行動できる条件にない。そこで、ホストファミリーには大学への朝夕の送り迎え、土日の休日も家族揃ってのアクティビティを依頼した。

以下は、学生の振り返りレポートからの抜粋である。

ホストファミリーとの出会いにおける戸惑いと不安について、「私は人と打ち解けにくい性格のため、2日目まではほとんどずっと部屋にいた」、「最初の夜ごはんの時はとても緊張した」、「私で4人目の受け入れだったので慣れている様子で安心した」、「色々と話しかけてくれたが、多分うまく返せていなかったと思う」などと、初めてのホームステイでの人間関係の不安、英語が通じないことの不安を述べている。次に、毎日の送り迎えの車の中での英語コミュニケーションが学生にとって一大仕事となる。最初の緊張の数日が過ぎた後の、ホストファミリーとの英語コミュニケーションに関して、「アメリカ人は察してくれないと思っ

たけど、そんなことは無かった」、「家族が多くて、誰に話しかけているのかと戸惑っていると、気づいてくれて、話の最後に私の名前を呼んでくれるようになった」、「家族みんなが私の英語を理解しようとしてくれたし、ゆっくり話してくれたり、分かりやすく言葉を変えて説明してくれたのが嬉しかった」、「実際に、クラスで学んだ表現を使ってホストファミリーと会話ができたときは、とても嬉しかった」

ホストファミリーとの生活体験では、「少し慣れてから、自分の家のような感じで生活することができた」、「この家の人とは相性が合わなかったもので耐えてきた、そのことに意味はあるし、親切にしてもらったことには変わらないので良い経験であり、感謝している」、「学校で出た宿題にも協力してくれた」、「食事は皆そろって食べて、会話がある」、「いつも自分のことより人のことを考えていてすごいなと思った。でも自分の思っていることはしっかりと言う」、「週末の楽しみ方は日本では考えられないほど、遊びにお金をかけ楽しんでいることが分かった」、「自分の意見をはっきり述べることは失礼なことではなく大切なことであることが実感できた」、「ホストファミリーの優しさや気遣いに感謝」などと、プラスの評価ばかりが記述されている中で、ホストファミリーと相性が合わなかったという正直な記述にも感謝の言葉が述べられ、貴重な体験をしていることがわかる。

### ④アクティビティ

バスをチャーターしての遠出は期間中1回だけで、ミシガン湖や周辺の湖畔の町を訪れる半日コースのみに抑えた。他にはコーディネータの采配で、ホストファミリーなどのネットワークを利用して地域住民のボランティア的協力によるアクティビティが2回用意された。1回目は、あるホストファミリーの好意でウィークデイの夕方に自宅裏の湖で「レイク・パーティー」と称して、チュービング、水上バイク、ボートなどで遊ばせてもらった。

2回目は、参加学生たちを感激させた「プログレッシブ・ディナー」(progressive dinner)と称する、地域住民との交流を目的としたアクティビティであった。「プログレッシブ・ディナー」とは、食事をオードブル・メイン・デザートとコースご



とに違う家を訪れてご馳走になるというものである。アメリカではチャリティを目的にして行われるポピュラーなイベントだそうである。湖周辺に点在する家庭4件を1件目のお宅のボートを借りて訪問し、食事をいただいた。家を提供してくれた人々はボランティア精神が豊かな人々で、学生は人々の懐の大きさを実感したものである。ホストファミリー以外の地域住民との交流として高く評価をしたい。

以下は学生の振り返りレポートからの抜粋である。「おもてなしにホスピタリティを感じた」、「関わった多くの人たちと話ができて楽しかったし英語の勉強にもなった」、「日本では味わうことのできないアクティビティで印象深かった」、「アクティビティを通じて心が通じ合って嬉しかった」、「アクティビティをしていくうちに、沢山の人のホスピタリティを受けた」など、アクティビティを通じてアメリカ人のホスピタリティ精神を実感している。

### 3. 「研修成果レポート」<sup>2</sup> に見る研修の効果・成果

帰国後、事後研修として「海外研修Ⅰ」で学生の報告を聞き、これから取り組む研修の成果を問うレポートの内容について確認し合った。また、パワーポイントでスライドを各自作成して、1年生は「基礎ゼミⅠ」の授業で発表し研修報告をした。「海外研修Ⅰ」の成績は、事前研修の評価とコーナーストーン大学から送られてきた英語授業の成績、「研修成果レポート」から評価された。

「研修成果レポート」にはテーマを課していた。「アメリカ研修に参加してー異文化コミュニケーションとホスピタリティ」と題して、滞在中に体験した英語・異文化コミュニケーションの難しさ、面白さ、達成感など、また、ホストファミリーや出会った人々から受けたホスピタリティについて書いてもらった。学生が滞在中に体験する様々な違いへの気づきと、人々とふれ合う中で体感するホスピタリティを通した異文化理解、そして、自分自身の成長等の目標が、成果として読み取れるかを見るための課題である。

ホスピタリティを課題に加えた理由は、本学の実教育目標の一つに「キリスト教に基づくホスピタ

リティ（他者への思いやり）」を挙げているからである。「ホスピタリティの実践に自ら考え行動しようとする意欲の高い人物を育てる」ことが強調されており、参加学生たちは1年次基礎科目の「ホスピタリティ論」を履修して、ホスピタリティについて学んでいるからである。

学生のレポート内容から、上記の点を絞り込んで検証した結果が次の通りである。

①英語が生活言語である環境で生きた英語を学び、ホームステイ先の家族と英語コミュニケーションをすることで、英語力向上への意欲が増している。

②異文化コミュニケーションを体験することにより、文化背景の異なる人々との間で互いの違いを認め合い、尊重することの大切さを実感している。

③出会った人々とのコミュニケーションを通して、漠然としていたホスピタリティが現実味を帯び、アメリカ人の"相手を思いやる精神"を日本人と比較して能動的に受けとめている。

④「アメリカ研修」への参加が自信や積極性につながり、将来に向けた自分へのグローバルな期待感が膨らみ始めている。

これらの結果は、学生たちが体験学習から得た知識や感情（心の動き）などに意味づけするという「振り返り」（reflection）を通して、より明確に学びの報告ができた結果と受け止めている。また、参加学生のほとんどが、「異文化コミュニケーション論」を履修しており、異文化理解の態度について事前研修でさらに意識づけをしていた。さらに、1年次の基礎科目の「ホスピタリティ論」の履修により事前学習ができていた。このことから、レポートが感想の域を脱して、文化比較や異文化コミュニケーションについて言及できたと考えている。さらに、④にあるように、この研修を通して海外に出向いて体験学習をすることの意義を深く受け止めていることは、帰国後に、短期大学在学中の長期・中期留学や卒業後の留学の説明会に参加する学生が半数以上いたことから明らかであった。「アメリカ研修」に参加することにより、海外での生活体験を積極的に受け止め、英語学習に意欲的な姿勢を自ら打ち出すことができたと言えよう。また、本学の建学の精神である

聖書の言葉に"主を畏れることは知恵の初め"（旧約聖書詩篇111編、10節）が「キリスト教概論Ⅰ」などで学生に周知されている。この言葉の意味するところは、「神と向かい合うことにより、傲慢に陥ることなく向上心を持って、しかし、常に謙虚に他者への愛を忘れない人間となること」である。「他者への愛」というのが聖書の説く、"ホスピタリティ"である。このことから、"アメリカ研修"での学びの多くは、本学の建学の精神や教育目標を顕現するものとして評価できよう。

以下に、「研修成果レポート」から一部の要約・抜粋を参考に挙げる。

- ・初めは英語を使うことが嫌だと感じる瞬間が時々あったが、最終的には英語でコミュニケーションをとることに面白さを感じられるようになった。
- ・気持ちさえあれば大切な思いはしっかりと相手に届くという事がわかった。
- ・言葉が通じるだけで、こんなにも嬉しい気持ちになるとは思ってもみなかった。これまで当たり前だと思っていた人と話せることや相手に意志が伝わることにもっと感謝しようと思った。
- ・日本人の考え方とアメリカ人の考え方は大きく違っていた。
- ・異なる考えも、おかしいと感じることも含め相手を理解、尊重できるようになれば、今まで気づけなかった新たな発見ができ、もっと成長できるのではないと思う。
- ・アメリカ人は表情が豊かで言いたいことははっきり言うため、性格にあまり表裏がないように感じた。感情表現も日本人に比べてストレートだった。その環境の中で2週間過ごす、自分があるままでいられる気がして非常に居心地が良かった。
- ・コミュニケーションのとり方に慣れていくうちに日本人とは全然違うことに面白さも感じた。
- ・違いを受け入れるのは現在のような多文化社会を生きていく上で必要不可欠なのである。
- ・漠然としていたホスピタリティという言葉も、この体験を通して学ぶことができた。
- ・他人にこんなに、日本語でいう"おもてなし"が自然とできるのかを考えたときにキリスト教精神という言葉が思い浮かんだ

- ・アメリカで触れたコミュニケーションのあり方やホスピタリティを通して、今まで自分は何事も始まる前から考えすぎて損をしていることが多かったことに気づいた。
- ・これからアメリカ以外にも様々な国を訪れて自分の世界観を広げていきたい。
- ・アメリカの生活やコミュニティを肌で体験することで、世界に対する視野が広がった。
- ・アメリカ研修に参加して、もっと世界を知りたいと思った。

#### 4. 今後に向けた課題

##### （1）プログラム内容における課題

研修の目的である、「ホームステイでの生活体験を通した英語・異文化コミュニケーション力の向上」は、学生に異文化コミュニケーションと媒介言語である英語の活用に対する意欲を向上させた。しかし、ここに課題が浮かび上がる。教室で行われる英語授業の補完的役割を担う、つまり、生きた英語コミュニケーションの相手が、面倒見の良いホストファミリーのみという点を課題として挙げたい。期間中の手厚い"おもてなし"に学生は感謝し、「多くの人々の優しさやホスピタリティに触れることができて自分の視野が広がった気がする」と振り返っている。しかし、海外研修担当の筆者には物足りなさが残ったのである。

ある学生のレポートに、ホストファミリーと週末に乗馬施設へ障害者支援のボランティア活動に出かけたとの報告があった。さらに聞いてみると、ホストファミリーの小学生の子ども達も当然のように障害のある人たちと馬との触れ合いに参加していたという。人々の活動に圧倒されながらその学生も自発的に活動に参加してきたとのことだった。ホストファミリーの手厚い保護から束の間開放され、乗馬施設で出会った人々から一人の自立した若者として扱われたわけである。障害児を乗せた馬の手綱を引いたり、鞍をつけたりする活動では、担当者から猛スピードの英語で指示されたり話しかけられたりして右往左往し、必要に迫られた人と人とのコミュニケーションという現実にはっと目が覚めた思いだったというわけである。こうした貴重な体験学習をしたのは研修中にこの学生1人だけだった。この体験から導き出され

ることは、本プログラムに学生が自主的にかかわる生きた英語コミュニケーションの相手・場所が不足していたということである。

ある短期大学の短期海外英語研修には、英語学習の補完的アクティビティに、自然保護団体や福祉団体の活動参加があった。これは、当該大学のカリキュラムの中で国際協力について学ぶための活動参加ということだが、結果としてボランティア活動は英語学習に多大な貢献をしたとある。英語習得のためのアプローチとしてみれば、「目標言語を学習や練習の対象として扱うのではなく、真のコミュニケーションの手段として扱える。学習者はより自立的に振舞うことができる」とコミュニケーションの促進を指摘している（浅野2006）。つまり、学生が自力でコミュニケーション能力を上達させる機会を提供することの大切さを基本にプログラムを構成しているのである。

筆者は、ホストファミリーとの生きた英語コミュニケーションが学生に与えたモチベーションの高さを評価するものであるが、必要に迫られた人と人とのコミュニケーションの場面で、相手と自主的にかかわるアクティビティがコミュニケーション力をさらに促進させると考える。こうしたアクティビティを体験学習として加えることを今後のプログラムの検討課題として提案したい。

## （2）学生参加を促すための課題

本プログラムは短期大学部の一学科のみの実施となっているのが現状である。専門性を問わず、どの学科の学生でも参加できる内容であり、全学的に学生の参加が奨励されているにも関わらず、現実的に他学科や学部からの参加は無い。若者の「内向き志向」が取りざたされる昨今であるが、長年、海外研修を担当している筆者には、それが本当に正しい指摘かどうか信じがたい。経済的事情で研修参加を断念する学生を毎年数多く見てきているというのも理由の一つである。

政府は平成23年に「グローバル人材育成推進会議」を設置し、グローバル人材育成の推進の必要性を訴えている。中間まとめには「今後10年間で18歳人口の10%となる約11万人が1年以上の留学や海外在住経験を持つことを目指す」など、若い世代のグローバル力の向上、つまり、国際感

覚を持ち、国際社会で活躍できる人材の育成を強調するための諸課題を挙げている。また、グローバル人材の3要素として、①語学力・コミュニケーション能力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティを挙げている。これについて、「単に語学力、国際感覚及び高度な専門性を兼ね備えた人材を指すのではない。すなわち、それは日本人としての自覚と誇り及び国際社会に生きる人間としての意識の双方を持ち、日本とは異なる文化・伝統・社会に敬意を払いつつ、そうした人々とともに行動するとともに、日本人ならではの視点を対外的に発信することのできる人材を指す。」（松井2011）という解説があった。大学がこうした提言に沿って、専門性を問わず、学生の海外への関心を高め、海外に押し出す役割を担うことが必然となってきたわけである。

学生の海外への関心を高め、積極的に海外研修参加を促すためには、全学的な工夫が必要と思われる。学生に海外への一步を踏み出す動機づけができるのは教員である。教員は授業で国際理解・異文化理解の必要性を説くことができる。短期間であろうと海外での生活体験のメリット、すなわち、自分自身を客観的に見直す機会を得ることができ、就職活動や進路選択にも有効であるとアドバイスすることもできる。現状において、専門学科は科目構成が固定化する傾向にあるため、学生に海外への関心を持たせ、海外研修に参加させるだけの余裕が不足していると思われる。今後の課題として、全学的に海外研修をカリキュラムに組み込むための構想を練ること、教員のモチベーションを高めること、学生対応における態度やスキルを構築することなどがあげられよう。

## おわりに

小規模大学では、海外研修プログラムが毎年実施できるかどうか危ぶまれながら実施にこぎついているのが現状であろう。現状打破には、複数の小規模大学が研修目的を同じくするプログラムを持ち寄り、整理し、目的や期間に応じたプログラムを共有・選択できる仕組みを作ること一案と思われる。大学間の連携には、それを推進しコー

ディネートする組織が必要となる。大学コンソーシアムの事業への働きかけはその一案であろう。良くも悪くも、近隣諸国を含む諸外国とのコミュニケーションは避けがたい時代になっている。世界のどこに居ても自分を失わずに異文化適応していける人材を輩出するために、大学を学外に、そして海外に向けて開放していきたいものである。

そのためには、学生に期待を持たせるための組織的な構想力がますます問われるであろう。

## 〈注〉

- 2012年度「アメリカ研修」日程  
6月18日（月）中部国際空港からデトロイト経由でグランドラピッズへ  
到着後、ただちにホームステイ先へ  
6月19日（火）コーナーストーン大学でオリエンテーションから授業開始  
6月20日（水）午前・午後 英語授業、夕方「プロGRESS・ディナー」  
6月21日（木）～22日（金）午前・午後 英語授業  
6月23日（土）～24日（日）ホストファミリーと過ごす  
6月25日（月）～26日（火）午前・午後 英語授業、マイヤー植物園見学（26日午後）  
6月27日（水）午前・午後 英語授業、夕方「レイク・パーティー」  
6月28日（木）午前・午後 英語授業、夕方、ホストファミリーを招いての「修了式」  
6月29日（木）エクスカーション（遠足）でミシガン湖や周辺の町を訪れる  
6月30日（土）～7月1日（日）ホストファミリーと過ごす  
7月2日（月）帰国の途につく  
7月3日（火）中部国際空港着 バスにて金沢へ  
今年度の「アメリカ研修」に担当教員は帯同しなかった。学期中の6月に実施したため大学を留守にするわけにいかないからであった。パートナーである旅行会社のプログラム・コーディネータと現地のコーディネータの2名がプログラムが円滑に進むよう取り計らい、筆者とスカイプやEメールを利用して連絡を取り合った。「アメリカ研修」の実施時期については、流動的であり休暇中の実施となれば教員が帯同することになる。そこで、本稿では、教員の引率の是非については取り上げない。

- 学生の「研修成果レポート」は、冊子「2012年度「アメリカ研修」報告書 ふれ合い、成長していく自分に気づいた日々ーそして、ホスピタリティの豊かさを実感した15日間」（北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部広報企画課2012）に掲載した。

## ＜参考文献＞

浅野享三、2006「Content-Based Instructionの視点から考えるボランティア活動目的の短期海外研修」南山短期大学紀要34号

松井一彦、2011「グローバル人材育成に向けた取組の課題ー米国大学等留学問題と対応のあり方」立法と調査320号（参議院事務局企画調整室編集）